

大学における人間形成科目としてのテニスの授業に関する一考察

野 田 達 也*

A Study on Tennis Classes as a Human Develop Subject at University

NODA Tatsuya*

Abstract

In this paper, after reconfirming the educational significance and educational purpose physical education at the university, the "tennis classes", which was positioned as a human development subject at our university, was developed by a program that embodies the educational goals of our own class. I would like to reconsider my practical programs to help improve the lessons in the future. In tennis classes, which are a difficult event to acquire skills, a program that promotes the improvement of the fundamental competencies for working persons is necessary in the process of acquiring skills, and the important thing to realize this is "how to make a group". I think there is. Three practical programs (Stroke practice by throwing a ball, Singles champion game on half court, Mini tennis in the arena) were presented and considered.

キーワード : 大学体育, テニス, 人間形成, グループ編成, 実践プログラム

Keywords : physical education at the university, tennis, human development, group, practical programs

1. はじめに

「体育実技・スポーツ実習」が人間形成科目・一般教養科目として大学カリキュラムに組み込まれる目的は、大学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーによって多様であるが、人間形成や知識・教養の獲得である。体育実技・スポーツ実習を人間形成や生涯スポーツへの導入を主な目的として実施するなら、当然のことながら、授業はその教育目的を具現化するプログラム・構成によって展開されるべきである。一般的に「テニス」は、技術習得の難易度が高い種目とされており、授業内容が「技術の習得・向上を目指す基本的な技術練習」や

「単なるゲームの実践」に偏りがちとの指摘を受けることがある。では、はたしてその授業内容は、技術練習やゲームの実践に重点を置くべきではないのだろうか。

板橋 (2014) は、大学の「テニスの授業受講者」に対するアンケート調査において、テニスの楽しさを感じる場面は「上手く打てたとき」「ラリーがたくさんつながったとき」との回答が多かったことを報告している。また、ラリー (テニス・卓球などでボールを連続して打ち合うこと) をつなげるには一定水準の技術 (正確なコントロール) が必要であるとして、「テニスの授業では楽しみだけではなく技術も向上させる指導力の高さが教員には必要である」と述べている。

金子 (2002, 2005) は、技術習得に着目した著書

* 理工学部共通教育群講師 Lecturer, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

の中で、「新しい動き方を身につけ、その習熟を高めていくプロセスにこそ、他の教科では代替できない人間形成の為の独自で貴重な教育契機が提供される」と述べている。

技術習得に時間を要するテニスにおいては、14回という限られた授業回数の中で、「技術の向上」・「楽しさの享受＝生涯スポーツの獲得」・「人間形成の助長」を包括的に実現するためには、技術を習得する過程（技術練習）において、受講者の人間形成を助長する教育プログラムを模索する必要がある。また、到達目標として主に掲げられる「ゲームの実践」においても、単なるゲームの遂行ではなく、受講者同士の交流を図るための創意工夫がなされるべきであり、筆者はそれらの手法について長く授業実践の中で追及し続けてきた。

しかしながら、自身の教育現場で実践するそれらの手法は、自身の経験値としてのみ蓄積されたものである。奈良（2015）は、大学体育における教育研究を主に掲載する「大学体育学」の振り返りの中で、「全国各地の様々な条件・環境下で優れた体育授業が実践されているが、その多くは教員と受講者の記憶にのみ共有されている」とし、「教育実践を言語化する努力が必要である」と述べている。これはまさに、筆者自身に向けられた授業改善への大きな課題であると捉えている。

そこで、本稿では、本学において人間形成科目として位置付けられた「テニスの授業」について、大学体育実技・スポーツ実習の教育的意義や教育目的を再確認した上で、自らの授業が教育目的を具現化するプログラムによって展開されているのかについて、いくつかの実践プログラムとともに考察することで見つめなおし、本研究を今後のさらなる授業改善の一助としたい。

2. 大学における「体育実技・スポーツ実習」の教育的意義と問題点

2.1 教育的な意義と効果

大学における体育実技・スポーツ実習の意義やあり方については、1947年の大学設置基準第22条が制定されて以来、その教育的価値や存在意義について長く議論の的とされてきた。そして、1991年

の大学設置基準の大綱化によって大学体育を必修とする法的根拠がなくなって以降は、より一層の議論が展開されてきたのは周知の事実であろう。

千賀（2002）は、大学体育の設置目的について「健康増進や体力の向上」、「人間・人間関係の形成」、「スポーツの普及と振興」の3つに分類している。中でも教育的効果の検証がなされやすい「健康増進や体力の向上」や「生涯スポーツへの導入」に関する研究報告は枚挙にいとまがない。一方、「人間形成」については、近年研究報告が増えつつある。

2006年、経済産業省により企業が新卒学生に求める人材の能力と大学の人材育成方針の不適合を解消するために、社会に求められる人材の概念として「社会人基礎力」が提唱された。大学における教育現場では、この社会人基礎力を向上させるための教育プログラムの重要性は高い。事実 Project Based Learning（以下 PBL）型実践教育などの教育プログラムの開発によって、大学教育における社会人基礎力獲得の教育効果が得られている（藤井・平尾, 2010；平尾, 2014）。

社会人基礎力は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされ、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つのテーマが掲げられている。さらに、これら3つのテーマは12の要素（主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）で構成されており、その要素の多くはスポーツ活動において助長される能力と密接な関係にあることが窺える。

全国体育連合「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査報告書」（2017）では、「スポーツ活動を通して身につけたり経験したりしたこと」として、「チームワーク力」、「コミュニケーション力」、「自己管理能力」が回答の上位に挙げられ、これらはいずれも社会人基礎力の構成要素であり、スポーツ活動が社会人基礎力を向上させる経験となっていることを報告している。

教育現場における実践的な研究としては、石道ら（2015）金田ら（2018）によって、一般教養体育授業が社会人基礎力に与える影響について報告がなされているほか、引原ら（2016）は社会人基礎力の

向上を意識した介入授業によって、ネット型スポーツ受講者の「主体性・働きかける力・課題発見力・傾聴力・状況把握力」といった能力が向上したことを報告している。

2.2 批判と問題点

このように、多くの識者によって大学体育実技・スポーツ実習の意義と教育効果について、様々な角度から研究がなされ見解が示されてきた。しかしその一方で、その意義を具現化する教育実践に対しては改善の必要性が多々論じられている。

森田ら（2008）は「教養教育の理念を全うできる指導手法を自らの研究と結び付いた形での授業展開を実施することで、大学教育としてふさわしい体育の内容を提示する必要がある」とし、田崎（2001）も、体育授業においては「健康や体力などのような直接的な効用を標榜するテーマを掲げるのではなく、改めてスポーツ本来の意味に戻り、その理念の実現へ向かう姿勢が要求されている」と述べている。

また、松田ら（2012）は、大学体育三大意義「健康・安全・体力の保持増進と向上」、「人間関係の形成」、「スポーツの普及と振興」について、実際の教育現場における教員による教授（伝授しようとしたこと）と学生の学習（伝授されたこと）との整合性を問う研究を行った。その結果「人間関係の形成」に関して、教授側と学習側に大きな意識の差が見られたと報告した上で、教育目標を具現化し高い学習効果を得るための「具体的な教授方法」の必要性を訴え、研究が効用論より実用論へと傾斜し、「実践プログラム」が提示されることを求めている。

3. 教育目的の具現化・プログラムの実践例

3.1. 教育目的の具現化へのポイント

先述した問題点を踏まえ、筆者は教育目的の具現化を果たすポイントを「グループ編成」にあると考えている。

テニスは技術の習得難易度が高いため、民間のテニススクールなどでは、初心者・初級者・中級者・上級者といった技術レベルによるクラスの細分化がなされているのが一般的である。そして、大学の授業においても、こうした技術レベルをもとに科目の分類や授業内でのグループ編成がなされるケー

スは少なくない。事実、筆者が本学に赴任した当時、体育（テニス）の授業は技術レベルによって初級・中級に分類されていた。

しかしながら、森田ら（2016）が「大学体育は高等学校やスポーツクラブでは実施できない内容であることが必要である」と指摘するように、大学体育実技・スポーツ実習では民間テニススクールが追及する「技術向上・生涯スポーツとしての楽しさ・運動習慣」のみならず、大学教育として希求される「人間形成」を目的とした独自性を持つプログラムを提供すべきである。そのために、筆者は経験者と未経験者が混合している大学特有の受講者状況を活かした「異なる技術レベルを混合したグループ編成（混合型グループ編成）」に着目し、プログラム毎に教育効果を検討した上で実践している。さらには、同一プログラムにおいても、混合型と統一型（技術レベルに応じた編成）を、受講者の技術習得状況や受講者の状況に応じて柔軟に使い分けることも必要であろう。そして、ゲームの実践では「ローテーション方法の設定」や「チーム戦の導入」などの、受講者同士の交流を活性化させる創意工夫が重要であると考えている。

3.2 本学における体育実技・スポーツ実習の目的

スポーツは心身の健康（Physical & Mental）のために非常に重要であり、卒業後も生涯に渡って、スポーツを実践してもらいたいとの考えに基づき、生涯スポーツの基礎となる知識・マナー・技術・体力を獲得することを目的としている。また、スポーツを通じて、知り・気付き・実行できる行動力および、他者との積極的なコミュニケーション行動を通して、自己主張・協調性を高め、さらには、様々な問題を解決していく能力を身に付け、豊かな感性を涵養していくことを目的として実施する。

（本学の体育・スポーツ実習のシラバスより）

本学では、以上のようにシラバスに明記した上で、スポーツを通じて得られる社会人基礎力の向上を主たる教育目的として掲げるとともに、評価基準においても「社会人基礎力」を重要な指標として設け

ている。

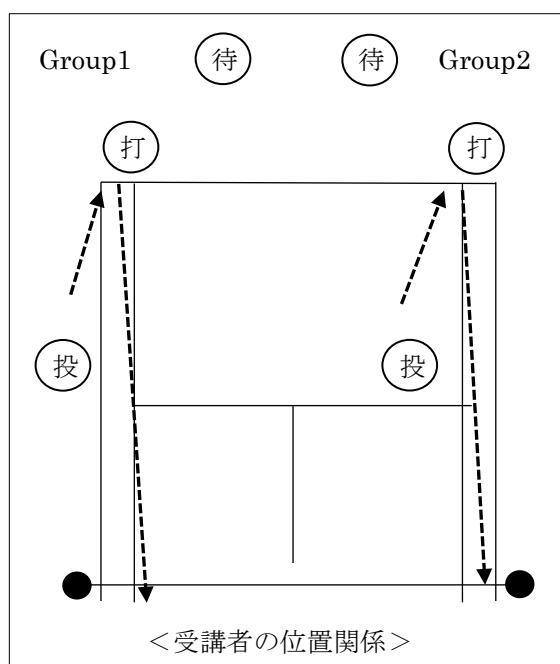
3.3 実践プログラムの例示および考察

ここでは、教育目的を具現化する実践プログラムを示すとともに、そのプログラムについて考察する。なお、ここで示すプログラムは、本学における「テニスコート3面に20名前後の受講生」という環境下での実施を前提としている。

実践プログラム① ～手投げ球出しによるストローク練習～

<手順>

- ① 経験者と未経験者を混合したグループ編成
- ② グループ練習におけるそれぞれの役割に応じた配置場所や進め方の説明
- ③ 教員による打球側のデモンストレーション
- ④ 教員の球出しによる、テニス経験者のデモンストレーション
- ⑤ グループに分かれての実践練習



手順①におけるグループ編成では、「テニス経験者と未経験者を混合する」ことが最も重要なポイントである。筆者が担当する体育・スポーツ実習（テニス）受講者における、テニスやその他ラケット競技の経験の有無については、一定の割合ではないものの、概ねテニス経験者が2～3割程度、テニス以外のラケット競技経験者が2～3割程度、未経験者が4～6割程度である。これらの受講者を6つのグ

ループ（1つのグループが半面を利用）に分ける際、そのグループ内に可能な限り1名はテニス経験者を配置し、その他ラケット競技経験者や未経験者を友人関係なども考慮しつつ編成する。

グループ内に経験者を含む理由の一つとしては、未経験者に対する「模範的な視覚情報の提供」が挙げられる。教員によるデモンストレーションにより模範的な動作を手順③において示すものの、グループでの実践練習の中で常に一つの模範となる動作が繰り返し視覚的情報として与えられることは、技術の習得に対して効果的である。

また、このプログラムにおける教育効果として最も期待しているのが、社会人基礎力の向上である。同一技術レベルのグループ編成では技術格差がないために、技術的な問題点に関する受講者同士の積極的な意見交換はなされづらい。一方、経験者を含む異なる技術レベルを混合したグループ編成では、未経験者は経験者の動作を模倣するために、そして経験者は未経験者の技術的な問題点を探るために、互いが他者観察を続けることになる。そうして得られた情報について、経験者は技術的な課題を相手に分かりやすく伝えるための「発信力」を身につける。また未経験者は、経験者によるアドバイスを丁寧に聴く「傾聴力」や技術的な課題を修正するための「主体性」「実行力」といった社会人基礎力が求められる。混合型グループ編成では、これらの能力向上を促す効果が期待できる。

手順②③④では、実際にグループ練習する際の、1) ボールを投げる側 2) ボールを打つ側 3) 待機する側 の位置関係を伝えつつ、安全面へ配慮をしながら進める。

ボールを打つ側に対しては、ボールを投げる側へボールを打ち出してしまわないための、技術的なアドバイスは必要最低限の伝達内容であるが、このプログラムが授業展開の初期段階に活用されることを踏まえると、未経験者に正確なコントロールを要求することは難しく、さらにはコントロールを失う原因がボールを投げる側にあるケースも少なくない。そのため、筆者は「ボールを投げる側への具体的な指示」が重要であると考えている。

そこで、手順④においてテニスにおける危険予測について熟知している筆者自らが「ボールを投げる

側」になり、投げるボールのスピードや、ボールを落下させる位置、投げ出す方向によっては、自身の方向へ打球される危険性があることを伝えている。そして、ボールを投げ出した後も打球する側の打点について常に注視し、ボールが飛び出す方向を予測する必要がある旨の注意喚起を丁寧に行っている。しかし、こうした注意喚起がなされていても、グループでの実践場面では、最悪のケースとして至近距離からの打球がボールを投げる側に向かうことも稀に起こりうる事象であり、上述した「グループ編成」において、ボールの打球方向に関する知識を有した（危険予測が可能な）テニス経験者をグループに1人配置しておくことは、授業の安全実施・危機管理という観点からも有効である。

手順③に示す「教員によるデモンストレーション」では、日本テニス協会が編集した「新版 テニス指導教本」（2005）において示されている「模範的な動作を背面から観察させると指導者との一体感が生まれ、見ているイメージではなく、自分で行うイメージを伝えやすい」ことを参考に受講者を配置している。

さて、このデモンストレーションというのは、模範的な動作を示すことのみが目的として捉えられがちだが、筆者は失敗例すなわち「テニス未経験者において起こりやすいミス」についても予め実演しておくことも重要視している。奥井（2015）は、身体教育学という立場から「手本とは師匠によって呈示されるものではなく、受け取る弟子からの働きかけを得ることによって、送り手と受け手とが共同的に探り合う中で、はじめて手本として成立する」と述べている。また、迫（2019）は、亀山（2013）の同調の理論を基に、「学習者のフォームの明らかな修正点に指導者が気づいたとき、指導者が学習者の（修正すべきポイントのある）フォームを再現する場合があります、学習者に自らの修正点を気づかせるには効果的である」と述べている。

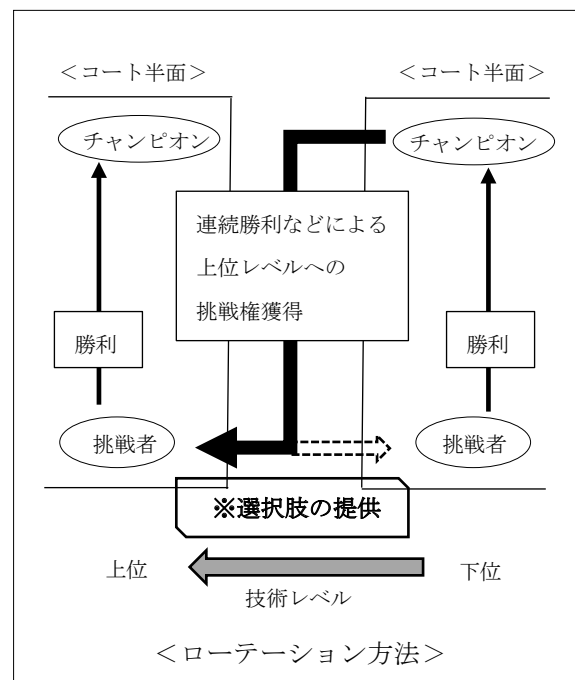
これらが示すのは、受講者の動作を観察した上で成り立つ指導効果であろうが、技術的要素が複雑に絡み合う種目特性を持つテニスでは、教授側は指導経験から「未経験者に起こりやすいミスの原因」について予め実演して伝えることが必要であると筆者は考えている。未経験者にとって、技術的な問題

点を見つけるのが困難な技術習得初期段階では、「ミスの原因の追究（課題の発見）」を、「受講者の主体性」にのみ委ねるべきではなく、教授側が豊富な経験を基に「予備知識を実演とともに与える」という働きかけこそが、受講者のその後の「課題発見力」や問題を解決するための「考える力」を育むことにつながるのではないだろうか。

実践プログラム② ～コート半面でのシングルスチャンピオンゲーム～

<手順>

- ① 技術レベルに応じたグループ編成（同一技術レベル）
- ② ゲームの進め方とルールの説明
- ③ 他のコートへの移動を含む「ローテーション方法」の説明
- ④ ゲームの実践



このプログラムでは、「技術レベルに応じたグループ編成」を採用している。テニスに限らず、あらゆるスポーツにおいてゲームが行われる場合、両者のレベルが拮抗していることは楽しさを増長するものである。事実、受講者に実施している授業後のアンケートにおいて、「同じ技術レベル同士のゲームが楽しかった」、「レベルが近い人同士だとストレスなくゲームを楽しめた」といった自由記述回答が

多数を占めている。これらを踏まえると、プログラムの開始時点では「楽しさの享受＝生涯スポーツの獲得」や「受講者の満足度」を考慮した「技術レベルに応じたグループ編成」を基本とすることが妥当であろう。

手順②ではゲームの実施方法を説明するとともに、「サービスを行う挑戦者側は、ゲームに勝利することで同コート内においてリターン側(チャンピオン側)への移動が可能となる」ルールを伝える。

その後の手順③におけるローテーション方法の設定がプログラムの教育効果上、重要なポイントとなる。具体的には、「自身の技術レベルのコートにおいてチャンピオンとして数回連続して勝利するなどの条件を満たすことによって、より上位レベルのコートへの挑戦権を得る」という独自のローテーションルールの適用である。このような上位レベルコートへの移動を可能にすることで生み出される流動性は、受講者の高い挑戦意欲を掻き立てるばかりでなく、より多くの受講者との交流を促すことにも有効である。

ただし、ここで筆者が留意しているのは「コートの移動はあくまでも権利として与える」ということである。上述したように、常に同一レベルでの対戦を望む受講者や、上位レベルに混ざってプレーすることに対して「レベルの高い人に対して申し訳ない」と感じる受講者が少なからずいるというのが現実的な問題として存在する。そのため、このルールによって「受講者が自身の挑戦意欲を優先するのか」、それとも「同レベルでのストレスフリーな状況を優先するのか」を選択できるよう配慮している。このような選択肢の提供は、受講者の「ストレスコントロール力」を培う上でも有効であろう。

一方、下位レベルコートへの移動については、受講者自身からの要望がない限りはルールとして設けていない。理由として、本プログラムではシングルスという一人でゲームを戦うという特性から、また筆者の授業実践における受講者との対話やアンケートの記述内容から、下位レベルコートへの移動は受講者の自信喪失や飽き(つまらなさ)を招きかねないと判断してのルールである。教授側の「受講者状況の把握」は、その状況に置かれた受講者との対話によって得られるものであり、こうしたやり取

りがお互いの状況把握力を育む上で重要である。

実践プログラム③ ～屋内での活動 (TENNIS PLAY&STAY プログラムの応用) ～

＜手順＞

- ① プログラムの目的の説明
- ② スポンジボールを用いての各種技術練習
- ③ ペアの編成およびローテーション方法の設定
- ④ ゲームの実践

大学におけるスポーツ実技の授業では、あらゆる屋外種目において、雨天時の対応については苦慮するところであるが、本学では体育館を代替実施場所として利用し身体活動を行うことが可能となるよう他の種目との調整を常に行っている。しかしながら、実際のテニスコートと同じ広さを活動スペースとして確保することは難しく、狭いスペースにおいてもテニスを通じた身体活動が行えるよう「TENNIS PLAY&STAY」プログラムを応用的に活用している。

「TENNIS PLAY&STAY」とは、世界的なテニス人口の減少に危惧した国際テニス連盟が立ち上げたプログラムである。そのコンセプトは「若者男女を問わず、テニスを始めたその日からゲームを楽しむこと」にあり、日本には2009年に上陸し日本テニス協会では「テニス普及活動」の主軸として広く紹介されている。プログラムで用いられるボールは大きさや飛び方が調整されており、使用するボールに応じてコートの広さも調整されている。テニス指導者の間では、子ども達を対象にした指導プログラムとして広く実践されており、テニス愛好家の間では、子ども向けプログラムといった印象が強いが、その最大の特徴は「参加者の技術レベルの高低に関わらず、一緒にゲームを楽しむことができる」というところにある。

この特徴を活かし、筆者はバドミントンコートを利用したスポンジボールによるミニテニスを雨天時のプログラムとして採用している。このプログラムでは受講者の「技術格差」を各段に減らすことが可能である。これにより技術レベルに関わらず、受講者全員がゲームと一緒にプレーすることが容易

になり、他者との関わりを活性化させる上で有効である。

手順②では、スポンジボールを用いて技術練習（新しいボールの体験）を行う際、本来のテニスラケットのほかに、ニュースポーツ用のラケット、卓球ラケット、素手を用いるなどの応用性を持たせている。これらの用具は、重さや長さ、面の広さが異なり、受講者には様々なラケットへの適応力と柔軟性が求められる。また、用具による難易度の違いを利用して、テニス経験を有する上級者に対して難易度の高いラケットを指定するなどの工夫で、上述した技術格差をさらに減らすことも可能である。

次に、技術練習における受講者の適応状況を踏まえた上で、手順③でのペアの編成を行う際、ゲーム開始時点では集団の技術レベルが均衡しているのが理想的である。しかしながら、「試合に勝つたびに、ラケットの難易度を高める」といった独自のルールの適用によってプレーの難易度調整も可能なため、固定されたペア編成でなくてもゲームを成立させることは可能となる。すべての受講者が「テニス経験の有無に関わらず一緒になってゲームを楽しむ」という教育的契機を提供するという意味では、ペアを固定することなく実施する手法も選択肢の一つであろう。このように、受講者の活動状況によって、「ペアの編成」や「ローテーションの方法」を適宜柔軟に変更可能となる点も、このプログラムの特徴である。

さらに、このプログラムでは技術的な難易度が低いことにより、未経験者が普段のテニスコートでは体現することが困難な「戦術的な駆け引き」に目を向けることもできる。「戦術的な駆け引き」が必要となる「状況判断力」「考える力」こそ、体育実技・スポーツ実習で培うことのできる「社会人基礎力」である。

最後に、本プログラムの先進性について、説明する事例を紹介する。2017年に改訂された『小学校学習指導要領解説体育編』において「バドミントンやテニスを基にした易しい(簡易化された)ゲーム」が例示され、その実践的な教材「テニピン」が、すでにいくつかの小学校では実施されている。「テニピン」については、開発からその学習価値の検討に

至るまで様々な報告（今井 2012, 2018, 2019：今井・鈴木, 2018）が開発者によってなされており、近年、日本テニス協会におけるテニス普及活動の一つの柱としても注目され、指導者に対する研修会においても広く紹介されている。このテニピンで使用するボール、特殊な用具(手にはめるラケット)、コート of 広さ(バドミントンコートとほぼ同様の広さ)は、本プログラムと類似しており、近い将来小学校で「テニピン」を経験した受講者が、本プログラムを経験することもあるだろう。そういった多様なテニス経験の数々が、テニスというスポーツが「競技として規定されたテニスコート、ネットの高さ、テニスラケット、テニスボール」によってのみ成立するのではなく、様々な環境・条件下においても創意工夫することで「年齢や性別、体力や技術レベルに左右されることなく一緒に楽しめるスポーツである」という柔軟な発想へと繋がれば、このプログラムはさらに価値あるものになるのかもしれない。

4. まとめと今後の課題

本稿では、人間形成科目として位置付けられた「テニスの授業」について、大学体育実技・スポーツ実習の教育的意義や教育目的を再確認した上で、教育目的を具現化するための自らの実践プログラムについて考察した。

大学教育においては、社会人基礎力の向上を目的とした能動的な学習方略（アクティブラーニング）を用いた PBL 型実践授業の効果的な導入が求められている。実践型教育が可能な体育実技・スポーツ実習では、「技術練習法やゲーム実践の場の提供」などに留まらず、一つ一つのプログラムの中に「人間形成・社会人基礎力の向上」を促すための具体的な手法を積極的に取り入れることができるだろう。この強みを生かし、実践的な手法を追及し続けることが教授側に求められており、そのためには、教授側と学生との意思疎通、つまりスポーツの場面で起こる一つ一つの事象に対する学生との対話を通じて学生の状況や状況を察知し、得られた情報を基に常にプログラムを改善し続ける努力が必要である。対面授業における、「対話による受講者の状況把握」

こそが、アクティブラーニングの本質である「教員と学生が相互に刺激を与えながら知的に成長することにつながるのではないだろうか。

今後の課題は、人間形成や社会人基礎力の向上を意識した自らの実践プログラムの数々について、その教育的効果を検証することである。そしてまた、それらの検証結果を研究報告することで、大学体育実技・スポーツ実習の教育的価値を高めることにも努めていきたい。

引用文献

- 藤井文武・平尾元彦（2010）社会人基礎力を高める授業の実践——産学連携 PBL 授業「アクティブラーニング」の取組. 大学教育, 7: 23-24.
- 引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一（2016）実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響. 大学体育学, 13: 16-25.
- 平尾元彦（2014）山口大学におけるキャリア学習の取り組み. 大学教育, 11: 36-42.
- 今井茂樹（2012）個の輝きから生まれる「深く考える」を求めて：第 4 学年「テニピン」の実践を通して（体育科）. 東京学芸大学教育学部附属小金井小学校研究紀要, 34: 143-146.
- 今井茂樹・鈴木秀人（2018）小学校体育授業における攻守一体プレイのネット型ゲームに関する一考察：直接返球するゲーム「テニピン」の学習価値の検討. 日本体育学会予稿集, 40: 137-142.
- 今井茂樹（2018）攻守一体プレイネット型ゲームの可能性を探る：「テニピン」の学面白さの追求を通して. 東京学芸大学教育学部附属小金井小学校研究紀要, 34: 143-146.
- 今井茂樹（2019）小学校体育における用具操作を伴う攻守一体プレイネット型ゲームに関する一考察：技術の系統性に着目して. 日本体育学会予稿集, 70 (0): 301_2-301_2.
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩（2015）選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について. 大学体育研究, 37: 1-10.
- 板橋クリストファーマリオ（2014）大学のスポーツ科目におけるテニス受講者の実態. 北里大学一般教育紀要, 19: 135-150.
- 亀山佳明（2013）身体論の可能性、その後——制度の身体論から体験の身体論へ—. 日本スポーツ社会学編『21 世紀のスポーツ社会学』創文企画.
- 金田晃一・引原有輝（2018）学外活動を伴う集中型の大学体育授業が受講学生の社会人基礎力におよぼす影響：ゴルフ種目を対象に. 大学教育学, 15: 22-30.
- 金子明友（2002）わざの伝承, 明和出版.
- 金子明友（2005）身体知の形成(上), 明和出版.
- 松田裕雄・吉岡利貢・河村レイ子・桐生習作・金谷麻理子・武田丈太郎・門野洋介（2012）大学体育の価値向上へ向けた一考察——教育実践における目標・教授・学習に着目して—. 大学体育学, 9: 69-92.
- 森田啓・林容一・引原有輝・谷合哲行（2008）大学体育は「健康」を学習目標にすべきか：大学体育における体育の位置づけに関する考察. 大学教育学会誌, 30 (2): 129-135.
- 森田啓・引原有輝・若林斉・金田晃一・西林賢武（2016）学士課程教育における大学教育：その可能性と再定義. 大学体育研究, 61 (1): 217-227.
- 奈良雅之（2015）大学体育学の振り返りと展望. 大学体育学, 12: 3-12.
- 日本テニス協会編（2005）『新版テニス指導教本』, 大修館書店.
- 奥井遼（2015）『<わざ>を生きる身体——人形遣いと稽古の臨床教育学一』, ミネルヴァ書房.
- 迫俊道（2019）テニスの授業実践における身体活動の意義に関する一考察. 大阪商業大学教職課程研究紀要, 3 (1): 11-17.
- 千賀康利（2002）教養教育としての体育——運動生理学の立場から. 大学創造, 12: 36-43.
- 田崎健太郎（2001）大学体育の設置基準の規制緩和を巡る論議に関する研究. 大学体育研究, 23: 1-16.
- 全国体育連合（2017）大学生のスポーツ経験と意識に関する調査報告書.